

令和3年度金沢大学資料館特別展

# 金沢大学と石川県 の考古学

—北陸人類学会から現在までの歩み—



2021

金沢大学資料館  
金沢大学埋蔵文化財調査センター  
石川考古学研究会

# 目 次

ごあいさつ	…p. 1
I 石川の考古学黎明期 —北陸人類学会とその前後—	…p. 2
コラム 1 北陸人類学会の父 須藤求馬	…p. 5
II 石川考古学研究会と地域の考古学	…p. 6
III 金沢大学の石川県内考古学的調査	…p. 8
コラム 2 井上鋭夫と北陸地方の遺跡	…p. 8
おわりに	…p. 14
附録 1 訪ねてみたい石川の遺跡	…p. 14
附録 2 関連年表	…p. 15
附録 3 考古学用語集	…p. 16
参考・引用文献	…p. 17

## 【凡例】

- ・本書は、金沢大学資料館・金沢大学埋蔵文化財調査センター・石川考古学研究会の三者共催による令和3年度金沢大学資料館特別展『金沢大学と石川県の考古学—北陸人類学会から現在までの歩み—』に合わせて作成した展示図録である。
- ・本書の構成と展示の構成は、一部異なる。
- ・本書の作成は、金沢大学資料館・埋蔵文化財調査センター兼任の松永篤知が担当した。
- ・本特別展の開催と本書の作成にあたって、日本考古学協会2021年度金沢大会実行委員会と石川県立歴史博物館には多大なご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

## ごあいさつ

金沢大学は、学内共同利用施設である資料館と埋蔵文化財調査センターに、それぞれ考古資料を多数所蔵しています。

資料館の考古資料は、明治期の旧制第四高等学校時代から金沢大学城内キャンパス時代にかけて収集されたものです。一方、埋蔵文化財調査センターの考古資料は、1997（平成9）年以降、角間・宝町・鶴間の各キャンパスに所在する構内遺跡から出土したものです。これらはいずれも、石川県域で暮らしていた過去の人々の営みを示す貴重な資料です。具体的には、縄文時代から近代までの、土器・陶磁器・瓦・石器・石製品・金属器・木製品・ガラス製品が豊富に揃っており、各時代の生活の様子が目に浮かびます。

なお、これらの考古資料は、法律上は文化財保護法の埋蔵文化財にあたり、法的にも重要な国民共有の財産です。

今回、金沢大学角間キャンパスで日本考古学協会 2021 年度金沢大会を開催するにあたり、金沢大学と石川県の考古学の歴史を紹介する本特別展を企画しました。資料館・埋蔵文化財調査センターの考古資料及び石川県立歴史博物館の関連資料を通して、石川の考古学 126 年の歩みを知っていただければと存じます。

1958（昭和 33）年に七尾市で、1973（昭和 48）年に金沢市で開催された、過去の日本考古学協会大会との関わりも含め、石川県の考古学がこれまでにどのように進展してきたのか、ぜひご覧ください。

最後に、本特別展の開催にあたって、多大なご協力をいただいた全ての皆様に、心より感謝申し上げます。

令和 3 年 9 月 10 日

金沢大学資料館長

金沢大学埋蔵文化財調査センター長

足立 拓朗

# I 石川の考古学黎明期 —北陸人類学会とその前後—

考古学 (archaeology) とは、過去の人々が残した物的痕跡 (遺構：溝や柱穴などの不動産的痕跡, 遺物：土器や石器などの動産的痕跡) を手がかりとして、彼らの営みを明らかにする学問である。我が国において科学的な学問としての考古学が始まったのは、1877 (明治10) 年に東京大学のお雇い外国人エドワード・シルヴェスター・モース博士 (Edward Sylvester Morse) が東京都品川区大森貝塚を発掘調査した時とされているが、以来140年余りの歴史がある。

石川県における考古学の始まりはというと、大森貝塚発掘調査の約20年後、1895 (明治28) 年のことである。具体的には、旧制第四高等学校 (金沢大学の前身校の一つ、以下、四高) 教員の須藤求馬<sup>すどうもとめ</sup>を発起人総代とする北陸人類学会の設立がそれにあたる。この北陸人類学会は、1886 (明治19) 年の東京人類学会設立を契機として、各地で誕生した地方学会の一つ (他に札幌・奥羽・中国・四国・沖縄・台湾) である。考古学・人類学・民俗学などに関心を持つ50余名で始まった北陸人類学会は、1900 (明治33) 年には会員総数100名を超えている。当時の地方学会には珍しく学会機関誌があり、1896 (明治29) 年から1901 (明治34) 年にかけての5年間で『北陸人類学会志』第1編～第4編を刊行している。

残念ながら北陸人類学会の活動は、『北陸人類学会志』第4編刊行後、須藤の熊本転勤もあり急速に衰退してしまう。しかし、県内の考古学的活動が消滅したわけではなく、1920～1930年代に石川県が史蹟名勝天然記念物保存法制定に伴う史跡調査を実施し、また昭和初期から終戦までの間に民間研究者が個々に遺跡の発掘調査や遺物の表面採集を行っている。そして、これらの活動に続く形で、1948 (昭和23) 年に石川考古学研究会が誕生するのである。

現在、金沢大学資料館は、北陸人類学会の収集品を軸とする四高時代の考古資料を多数所蔵しており、当時の考古学的活動の一端を知ることができる。縄文時代の縄文土器 (写真2)・石器 (写真3・4)、弥生時代の弥生土器 (写真5)、古墳時代の土師器 (写真6)・須恵器 (写真7・8)・埴輪 (写真1・9)、平安時代の須恵器 (写真10)、平安時代末～室町時代の珠洲焼 (写真11・12) など、北陸地方を中心とする各地・各時代の遺物が揃っており、学術標本としての価値は高い。

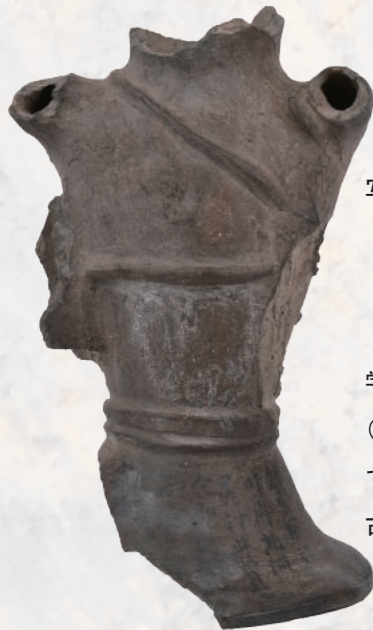
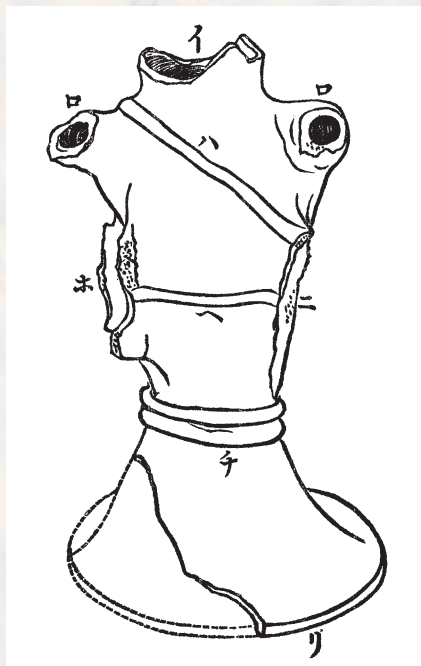


写真1 宝達志水町北川尻出土埴輪  
(古墳時代後期, 高さ38cm, 金沢大学資料館蔵)

『北陸人類学会志』第2編 (北陸人類学会1898a) で紹介された、北川尻村 (現宝達志水町) 出土とされる人物埴輪である (図1)。小松市矢田野エジリ古墳出土の埴輪と共通点が多く、関係が注目される。

図1 北川尻出土埴輪の紹介図 (北陸人類学会1898a)



写真2 津幡町刈安出土縄文土器  
(縄文時代中期, 高さ 6.3cm, 金沢大学資料館蔵)



写真3 金沢市笹塚出土磨製石斧(左)と  
金沢市旧野村練兵場出土打製石斧(右)  
(縄文時代, 左: 長さ 12.2cm, 右: 長さ 14.3cm,  
金沢大学資料館蔵)



写真4 金沢市大野濱出土石錘  
(縄文時代, 長さ 6.2cm, 金沢大学資料館蔵)



写真5 金沢市大野濱出土弥生土器  
(弥生時代中期, 高さ 4.7cm, 金沢大学資料館蔵)

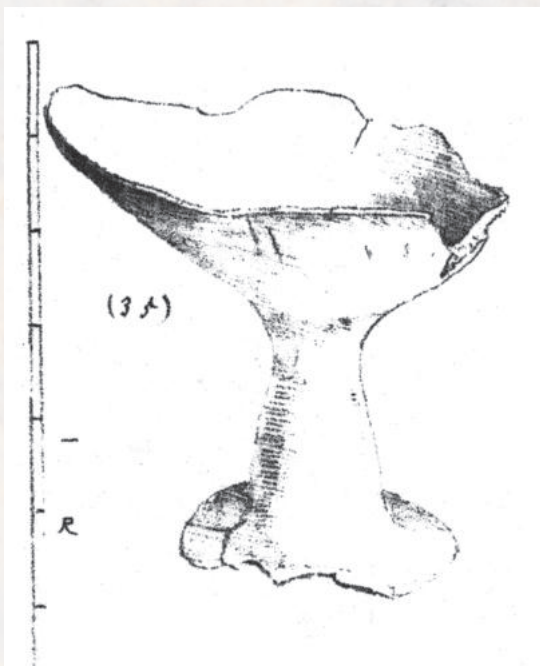


図2 大野出土土師器 高杯の紹介図  
(北陸人類学会 1896)



写真6 金沢市大野出土土師器 <sup>たかつき</sup>高杯  
(古墳時代中期, 高さ 13.7cm, 金沢大学資料館蔵)

『北陸人類学会志』第1編(北陸人類学会 1896)で  
紹介された, 大野村(現金沢市)出土の土師器高杯で  
ある(図2)。図の脚部が一部失われている。



写真7 かほく市気屋古墳出土須恵器 高杯（左・中央）・<sup>ほろう</sup>甕（右）  
 （古墳時代後期，左：高さ 10.4cm，中央：高さ 20.6cm，右：高さ 17.1cm，金沢大学資料館蔵）



写真8 かほく市気屋古墳出土須恵器 蓋杯  
 （古墳時代後期，杯身：径 12.0～15.0cm，杯蓋：径 11.5～11.6cm，金沢大学資料館蔵）  
 手前の蓋杯のセット2組は，気屋横穴出土の可能性ある（宇ノ気町史編纂委員会 1970）。



写真9 宝達志水町北川尻出土埴輪  
(古墳時代後期, 高さ 19.5cm, 金沢大学資料館蔵)



写真10 金沢市第四高等学校敷地出土須恵器 蓋杯  
(平安時代, 左: 径 16cm, 右: 残存径 12cm, 金沢大学資料館蔵)



写真11 内灘町粟崎出土珠洲焼 甕  
(平安時代, 残存幅 16cm, 金沢大学資料館蔵)



写真12 珠洲焼 播鉢  
(室町時代, 残存幅 8cm, 金沢大学資料館蔵)

## コラム1 北陸人類学会の父 須藤求馬

北陸人類学会発起人総代の須藤求馬は、徳島県美馬市出身の四高教員である。1857（安政4）年生まれで、1883（明治16）年に東京大学に入学、1887（明治20）年に卒業した後、1892（明治25）に第四高等中学校（1894年に第四高等学校に改称）の助教授となった。その3年後に、北陸人類学会を設立したのである。石川の考古学黎明期における須藤の貢献は大きい。

しかし、1897（明治30）年、須藤は熊本の第五高等学校（現熊本大学）の教授となり、金沢を去る。その直後から、北陸人類学会は急速に衰退しており、須藤がいかに重要な存在であったかが分かる。

金沢大学資料館には、「阿波國」・「阿波美馬郡重清村荒川名の塚穴」と注記された須恵器がある（写真13）。これらは、須藤が故郷の古墳から採集してきたものと見られ、当時の活動の貴重な証拠である。



写真13 徳島県採集須恵器  
(古墳時代後期, 左: 径 15.8cm, 右: 残存長 8.7cm, 金沢大学資料館蔵)

## II 石川考古学研究会と地域の考古学

北陸人類学会設立から半世紀以上が経った1948（昭和23）年、石川考古学研究会（以下、石考研）が誕生する。皇国史観から脱却した科学的な歴史学を求めて、石川県立金沢第一高等学校（現石川県立金沢泉丘高等学校）教員の<sup>たかほりかつき</sup>高堀勝喜が中心となり、歴史教員・在野研究者が集結したのである。

その後、石考研は、県内に広く在住する会員の協力によって地域の基礎資料を着々と蓄積しながら、積極的に考古学的活動を展開していく。

1952（昭和27）・1953（昭和28）年に九学会連合（日本言語学会・日本考古学会・日本社会学会・日本宗教学会・日本心理学会・日本人類学会・日本地理学会・日本民俗学会・日本民族学会）による能登の総合的学術調査が実施されると、石考研からも<sup>やまのうちすがお</sup>高堀勝喜らが参加した。この時の主な成果として、東京大学の<sup>こまいかずちか</sup>山内清男を中心とする縄文土器の編年研究や、東京大学の<sup>おおつかはつげ</sup>駒井和愛を中心とする古墳の発掘調査が挙げられる。

この九学会連合の能登調査に刺激を受けて、1954（昭和29）年、石考研は旧福野湯周辺の総合調査を実施する。他学会や県内高校地歴クラブの協力を得て、志賀町堀松貝塚などの発掘調査が行われた。これら高校地歴クラブを指導したのも、石考研の会員らである。

1950～60年代には、市町村による自治体史編纂が盛んとなり、それに合わせて考古学的な調査・研究も進められた。七尾市では、1957（昭和32）年に石考研の<sup>はしもとすみお</sup>橋本澄夫を中心に、初の古墳発掘として三室古墳群の発掘調査が実施されている。その翌年、橋本らは明治大学の<sup>ごとうしゆいち</sup>後藤守一・<sup>おおつかはつげ</sup>大塚初重の指導の下で同市高木森古墳の発掘調査を実施し、これが縁となり日本考古学協会初の地方大会（総会）が七尾市で開催されることになった。

1958（昭和33）年10月25・26日、七尾市文化センターにて、日本考古学協会第22回総会が開催された（写真16）。当時の新聞記事を見ると、東京芸術大学の<sup>ふじたりようさく</sup>藤田亮策、東京大学の<sup>はらだよしと</sup>原田淑人・<sup>はせべことんど</sup>長谷部言人、國學院大学の<sup>おおぼいわお</sup>大場盤雄、奈良国立博物館の<sup>いしだもさく</sup>石田茂作ら重鎮をはじめ、全国から日本考古学協会員43名と、石考研会員80余名が参加したと記されている。この総会初日、石考研からは<sup>あきたきいち</sup>高堀勝喜や<sup>あきたきいち</sup>秋田喜一が研究発表している（写真14）。二日目の26日には、石考研の<sup>うえのよいち</sup>上野与一を含む研究発表及び記念講演の後、七尾市高木森古墳や中能登町雨の宮古墳の自由見学になったという（写真15）。

さらに、この総会と石考研創立10周年を記念して、同会場で石川県考古学資料展が開催されており、伝河北潟畔出土銅鐸をはじめ、県内出土の名品80点が展示されている（写真17）。



写真14 日本考古学協会第22回総会開幕を伝える記事（石川県立歴史博物館蔵）



写真15 日本考古学協会第22回総会閉幕を伝える記事（石川県立歴史博物館蔵）



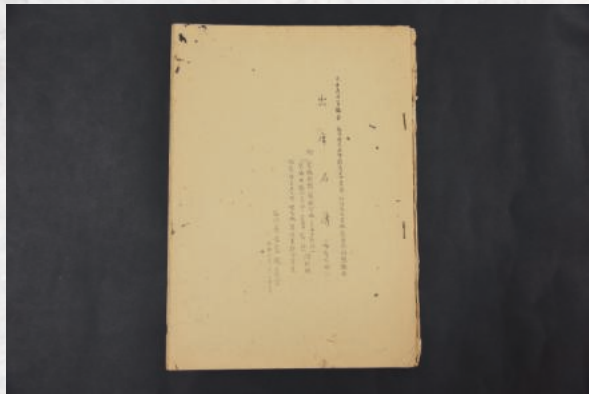


写真 16 日本考古学協会第 22 回総会懇親会出席名簿  
(石川県立歴史博物館蔵)



写真 17 石川県考古学資料展目録  
(石川県立歴史博物館蔵)

さて、1950～70年代は、全国的に高度経済成長に伴う大規模開発の時代に入り、石川県でも工事に伴う緊急発掘調査が激増する。その代表例が、北陸自動車道建設に伴う発掘調査である。1969（昭和44）年には、秋田喜一石考研会長を団長とする発掘調査団が結成され、石川県教育委員会の調査員が増員される1973（昭和48）年度までは石考研主体で北陸自動車道関連の発掘調査が進められた。

そのような中、1973（昭和48）年11月24・25日に、日本考古学協会の第40回大会が石考研との共催で金沢市で開催された（写真18）。会場は3つに分かれ、石川県社会福祉会館では「北陸を中心とした縄文時代晩期の問題」をテーマとする第1分科会が、金沢市立中央公民館講堂では「北陸を中心とした古墳文化の発展と伝播」をテーマとする第2分科会が、石川県郷友会館では「中世古陶を中心とした日本海沿岸文化の交流」をテーマとする第3分科会が開催された。



写真 18 日本考古学協会第 40 回大会研究発表要旨  
(石川県立歴史博物館蔵)

ちょうどこの頃は、日本考古学協会の改革・解体を求める学生運動が激しい時期であり、大会当日には反アカデミズム運動の学生と石考研の討論集会の場が持たれたという。その際に石考研が示したのは、大学アカデミズムに頼らず、地域の遺跡は地域の研究者が守り研究するという同会の基本姿勢だった。

1970年代に、石考研は寺家遺跡などの保存運動を通して開発優先の県当局と文化財保護行政や調査体制の充実をめぐる激しく対立し、1979（昭和54）年に石川県立埋蔵文化財センター（1998年に石川県埋蔵文化財センターとして財団法人化）が設立された。

時は流れて現在、県内の発掘調査は、主に石川県埋蔵文化財センターをはじめとする各自治体の埋蔵文化財担当者が実施している。近年では、北陸新幹線建設に伴う発掘調査が特に大規模であったが、それが一段落ついた今も、新発見が相次いでいる。また、これまでに市町による史跡整備なども県内各地で進められている。近年における調査・研究・史跡整備の代表的遺跡としては、小松市八日市地方遺跡（弥生時代）、能美市能美古墳群（古墳時代）、野々市市末松廃寺跡（古代）、羽咋市寺家遺跡及び柳田シャコダ廃寺跡（古代）、金沢市千田北遺跡（中世）、七尾市七尾城跡（中世）、金沢市金沢城跡及び城下町遺跡（近世）などが挙げられよう。なお、県内自治体の埋蔵文化財担当者の多くが石考研の会員であり、単なる埋蔵文化財行政の枠にとどまらず、それぞれが地域に根差した考古学的研究を日々進めている。

### Ⅲ 金沢大学の石川県内考古学的調査

さて、これまで見てきたように石川県では、北陸人類学会や石川考古学研究会が、地域に根差した考古学的活動を進めてきた。その学術的貢献は計り知れない。その一方で、金沢大学も石川県内で少なからず考古学的調査を実施しており、いずれも十分な学術的意義を有している。現在、金沢大学の考古学というと、外国考古学がその代名詞となっている。事実、これまでに中国・東南アジア・中央アジア・南アジア・西アジア・エジプト・アメリカといった各地の考古学のエキスパートが在籍しており、それも金沢大学の考古学が誇る大きな強みであることは間違いない。しかし、それだけでなく、大学構内遺跡をはじめとする、県内遺跡の調査成果も決して忘れてはならない。以下では、金沢大学がこれまでに石川県内で実施した考古学的調査を、具体的に紹介する。

まず、第一に挙げたいのが、考古学研究室設立以前から行われていた金沢城跡の発掘調査である。有名な話であるが、金沢大学のメインキャンパスは、かつて金沢城内にあった（1989～1994年にかけて角間キャンパスに移転）。その城内キャンパス時代に、金沢大学の歴代教員が、金沢城跡各所を発掘調査しているのである。

中でも、歴史上最初に金沢城跡を発掘調査したのは、井上銳夫<sup>いのうえとしお</sup>である。井上は、1968（昭和43）・1969（昭和44）年に、本丸・本丸附段・二ノ丸・三ノ丸の各所を発掘調査しており、各地点から土器（写真24）・陶磁器・瓦（写真25）・金属製品・木製品などが多数出土している。井上は、金沢大学の日本史教員であるが、当時、金沢大学に考古学研究室は無く、吉岡康暢<sup>よしおかやすのぶ</sup>（当時石川県立郷土資料館職員、石考研）らとともに、発掘調査を実施したのである。特筆すべきは、二ノ丸の調査で、絵図にない石室を発見し、中から土師器皿や釘隠し、ウリ科種子などが出土している。

考古学研究室設立後も、上野佳也<sup>うえのよしや</sup>、佐々木達夫<sup>ささき たつお</sup>、貞末堯司<sup>さだすえ たかじ</sup>が、金沢城跡内を発掘調査しており、いずれも近世をはじめとする陶磁器・瓦などが出土している。

#### コラム2 井上銳夫と北陸地方の遺跡

井上銳夫は、一向一揆研究で知られる石川県出身・四高出身の日本史研究者だが、金沢城跡以外にも、北陸地方の遺跡と関わりがあった。

一つは、金沢市の高尾城跡である。この城は一向一揆に攻め落とされた富樫氏の山城であるが、北陸自動車道建設のための土取り工事で広範囲が破壊されてしまった。この問題を指摘したのが、井上だった。

もう一つは、福井県福井市の一乗谷朝倉氏遺跡である。現在、国の特別史跡として有名な戦国時代遺跡であるが、1970（昭和45）年、上城戸の外側で区画整理工事が始まった。それを知った井上は、工事を止めて5日間の発掘調査を実施し、出土遺物として越前焼や阿弥陀如来像（写真19）などを得ている。



写真19 一乗谷朝倉氏遺跡出土阿弥陀如来像  
石板（戦国時代、高さ：46cm、金沢大学資料館蔵）



写真 20 金沢市金沢城跡本丸跡採集石塔 塔身  
(室町時代, 高さ 44cm, 金沢大学資料館蔵)



写真 21 金沢市金沢城跡御宮跡出土石塔 笠  
(室町時代, 高さ 20.7cm, 金沢大学資料館蔵)



写真 22 金沢市金沢城跡御宮跡出土石塔 水輪  
(室町時代, 高さ 14cm, 金沢大学資料館蔵)



写真 23 金沢市金沢城跡御宮跡出土石塔 水輪  
(室町時代, 高さ 17.0cm, 金沢大学資料館蔵)

写真 20～23 は、金沢城跡内で見つかった中世の石造物である。いずれも、石材は凝灰岩の類である。これらのうち、写真 20 の石塔塔身は 14 世紀中頃のものと思われる（三浦・在田 1994）、残る 3 点は 15 世紀前半～中頃の位置づけが考えられている（三浦 1997）。これらの資料から、14 世紀から 15 世紀にかけて、同地で中世墓が営まれていたことがうかがわれる。金沢城築城より前の状況を知ることができる貴重な資料である。



写真 24 金沢市金沢城跡出土土師皿  
(江戸時代, 径 13.8cm, 金沢大学資料館蔵)



写真 25 金沢市金沢城跡出土土瓦  
(江戸時代, 径 15.5cm, 金沢大学資料館蔵)

次に、金沢大学考古学研究室と金沢大学考古学研究会による石川県内の考古学的調査について紹介する。

金沢大学考古学研究室は、1974（昭和49）年に、日本海側の国立大学初の考古学専門研究室として設けられた。初代教授の上野佳也は日本先史考古学の研究者である。その後、1977（昭和52）年に出土陶磁器研究者の佐々木達夫が着任し、続いて1980（昭和55）年にアメリカ考古学研究者の貞末堯司が着任した。その後も、中村慎一、田辺勝美、藤井純夫、高濱秀、足立拓朗ら外国考古学を専門とする研究者が入れ替わりながら着任しているが、考古学研究室として県内遺跡の調査に少なからず関わっている。その代表例としては、1979（昭和54）・1980（昭和55）年に実施した加賀市再興九谷松山窯跡の発掘調査、1984（昭和59）年から1987（昭和62）年にかけて金沢市角間総合移転用地内で実施した隧道遺構及び乾場山遺跡の発掘調査、1985（昭和60）年に実施した金沢市末古窯群の分布調査、1990（平成2）年に実施した中能登町阿弥陀藪遺跡の発掘調査などが挙げられる。縄文時代から近代まで、多岐にわたる調査を実施しており、得られた成果も大きい。それぞれの成果は、調査報告書などの形で広く発信されている。

一方、金沢大学考古学研究会は、学内の考古学サークルであるが、研究室よりも5年歴史が古く、井上鋭夫を顧問として1969（昭和44）年に発足して以来（当初の名称は考古学クラブ、1973年に改称）、能美地域の遺跡分布調査や古墳の測量調査などを行ってきた。同研究会の会員は考古学専攻の学生に限らないが、石川考古学研究会との関係が深く、考古学研究室に引けを取らないほどの成果を上げている。具体的には、1972（昭和47）年の能美市旭台遺跡の発見、1976（昭和51）・1977（昭和52）年の能美市湯屋古窯跡群の発見、1977（昭和52）年から1979（昭和54）年にかけての能美市和田山・末寺山古墳群の発掘調査、1982（昭和57）・1983（昭和58）年の小松市河田山1号墳の発掘調査、1984（昭和59）年の能美市秋常山1号墳の発見、1989（平成元）・1990（平成2）年の金沢市御所八ッ塚山古墳群の発掘調査（同古墳群の測量は現在も継続中）、1991（平成3）・1992（平成4）年の輪島市時国古屋敷遺跡の発掘調査などを挙げることができる。金沢大学考古学研究会の活動について特筆すべきは、ただ単に遺跡を調査するだけでなく、遺跡の保存や史跡整備にも積極的に関わってきたことである。その点で、石川の考古学及び埋蔵文化財に対する貢献度は極めて高い。

現在、金沢大学考古学研究室と同考古学研究会は事実上一体化しており、若き考古学徒が熱心に考古学を学んでいる。近年の活動としては、御所八ッ塚山古墳群（写真26・27）の測量を継続的に実施しており、各古墳の墳形の詳細が着々と明らかになってきている。2016（平成28）年には現地説明会も実施しており、古墳群近隣の御所町及び小坂町の地域史への貢献にもつながっている。



写真26 金沢市御所八ッ塚山3号墳



写真27 金沢市御所八ッ塚山4号墳墳頂にて

最後に、金沢大学埋蔵文化財調査センターによる金沢大学構内遺跡の発掘調査について紹介する。

金沢大学埋蔵文化財調査センターは、1997（平成9）年に開所した学内共同利用施設である。城内キャンパスから角間キャンパスへ移転するにあたって構内で遺跡が発見されたことを契機に、構内遺跡の緊急発掘を担う専門機関として設立された。金沢大学の構内遺跡としては、角間キャンパス（人間社会学域、理工学域、医薬保健学域薬学類・創薬科学類、融合学域）に角間遺跡が、宝町キャンパス（医薬保健学域医学類・附属病院）に宝町遺跡が、鶴間キャンパス（医薬保健学域保健学類）に鶴間遺跡がある。

角間遺跡は、縄文時代中期と平安時代を中心とする遺跡で、縄文時代中期前葉の土器のまとまり（写真31）や、平安時代の信仰などに関係すると見られる遺構・遺物が見つまっている。平安時代の遺構として、埋葬施設と推測される方形周溝状遺構（写真28）が特筆され、その貼床面付近から石帯（写真32）やガラス玉（写真33）が出土している。さらに注目される平安時代の遺物として、「一乗」・「寺」と書かれた墨書土器（写真34）や、越州窯系の青磁水注（写真35）が挙げられ、山間寺院「一乗寺」の存在をうかがわせる。



写真29 宝町遺跡で見つかった近代眼科病棟跡

鶴間遺跡は、かなり特殊な存在で、近世遺跡でもあるが、最大の特徴は近代の監獄・刑務所跡である。すなわち、明治五大監獄の一つである金沢監獄（他は千葉・奈良・長崎・鹿児島）及び後の金沢刑務所の遺跡であり、遺構としては五翼放射状舎房の建物跡が検出され（写真30）、遺物としては監獄食器（写真42）・刑務所食器などが出土している。

このように、金沢大学構内だけでも、縄文時代から近代までの遺跡が多様に存在している。これらに対して、金沢大学埋蔵文化財調査センターが約四半世紀にわたり発掘調査を実施し続けてきたことには、十分な学術的意義があると言えよう。



写真28 角間遺跡で見つかった平安時代の方形周溝状遺構

宝町遺跡は、近世と近代を中心とする遺跡で、加賀藩与力町及び寺域の遺構・遺物や、金沢大学附属病院の前身にあたる近代病院の遺構（写真29）・遺物が見つまっている。近世の遺物としては土器（写真36）・陶磁器（写真37・38）・土人形（写真39）・瓦・木製品・金属製品などがあり、近代の遺物としては病院食器（写真40）やガラス瓶（写真41）がある。



写真30 鶴間遺跡で見つかった近代監獄跡



写真 31 金沢市角間遺跡出土縄文土器  
 (縄文時代中期, 左: 高さ 13.6cm, 中央: 高さ 25.6cm, 右: 高さ 13.6cm, 金沢大学埋蔵文化財調査センター蔵)



(表) (裏)

写真 32 金沢市角間遺跡出土石帯 (丸鞆)  
 (平安時代, 幅 3.2cm, 金沢大学埋蔵文化財調査センター蔵)



写真 33 金沢市角間遺跡出土ガラス玉  
 (平安時代, 径 0.9cm, 金沢大学埋蔵文化財調査センター蔵)



写真 34 金沢市角間遺跡出土墨書土器  
 (平安時代, 左: 底径 7.5cm, 右: 底径 5.5cm, 金沢大学埋蔵文化財調査センター蔵)



写真 35 金沢市角間遺跡出土青磁水注  
 (平安時代, 高さ 20.2cm, 金沢大学埋蔵文化財調査センター蔵)



写真 36 金沢市宝町遺跡出土土師器皿  
 (江戸時代, 左: 径 8.4cm, 中央: 径 11.0cm, 右: 径 8.9cm, 金沢大学埋蔵文化財調査センター蔵)



写真 37 金沢市宝町遺跡出土暦手茶碗  
(江戸時代, 高さ 7.1cm, 金沢大学埋蔵文化財調査センター蔵)



写真 38 金沢市宝町遺跡出土春日山窯  
染付碗 (左)・色絵碗 (右)  
(江戸時代, 左: 高さ 4.6cm, 右: 高さ 3.8cm,  
金沢大学埋蔵文化財調査センター蔵)



写真 39 金沢市宝町遺跡出土土人形  
(江戸時代, 左: 4.6cm, 中央: 4.7cm, 右: 6.2cm,  
金沢大学埋蔵文化財調査センター蔵)



写真 40 金沢市宝町遺跡出土病院食器  
(近代, 左: 高さ 4.9cm, 中央: 蓋を含む高さ 9.7cm,  
右: 径 18.4cm, 金沢大学埋蔵文化財調査センター蔵)



写真 41 金沢市宝町遺跡出土ガラス瓶  
(近代, 左: 高さ 7.9cm, 右: 高さ 7.3cm,  
金沢大学埋蔵文化財調査センター蔵)



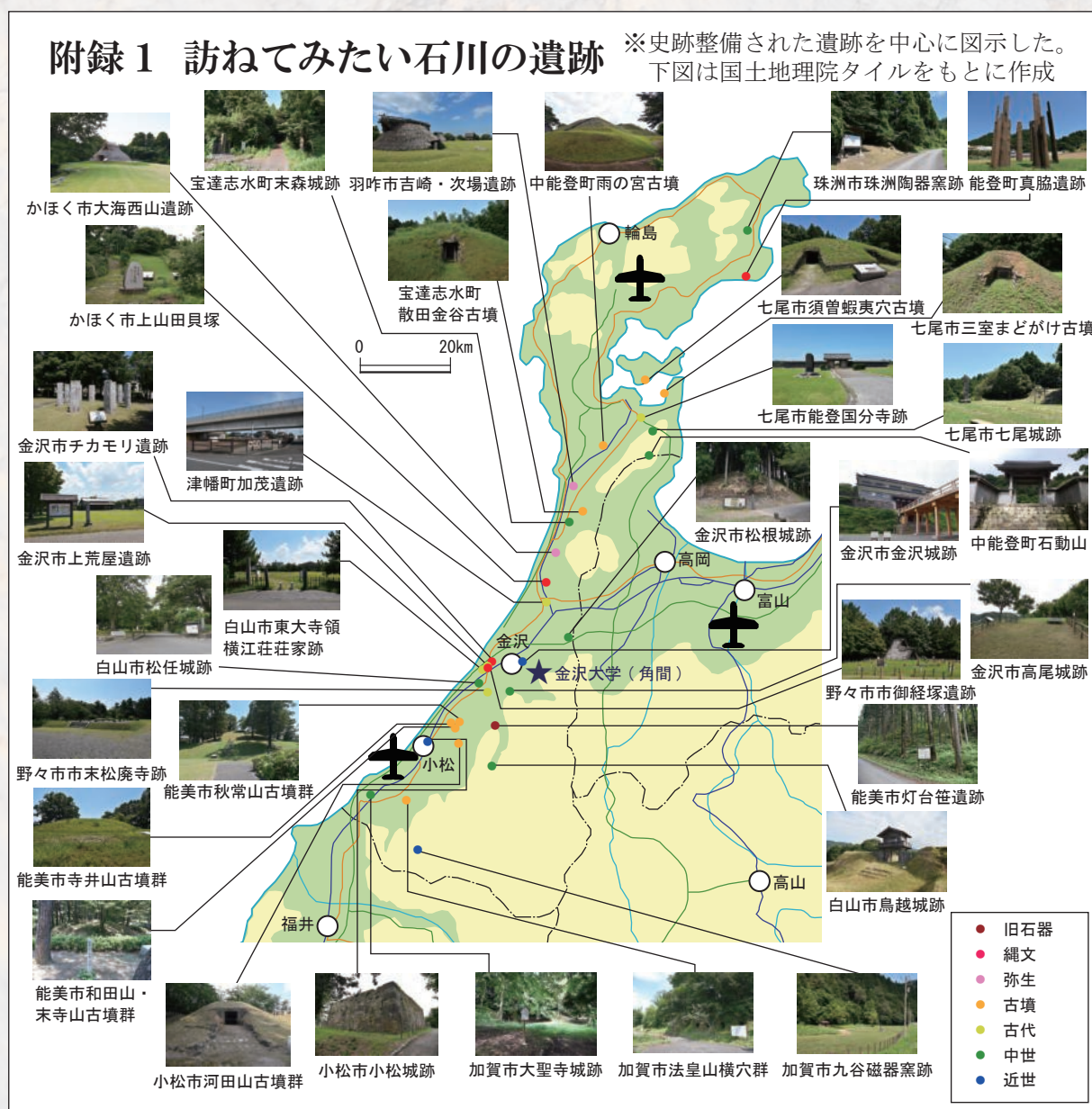
写真 42 金沢市鶴間遺跡出土監獄食器  
(近代, 底径 5.7cm, 金沢大学埋蔵文化財調査センター蔵)

# おわりに

以上、北陸人類学会から、石川考古学研究会、そして金沢大学の考古学の歩みを、具体的な資料とともに駆け足で見てきた。今回紹介したのは、126年にわたる考古学的活動の一端に過ぎないが、それでも石川の考古学研究者たちが、いかに精力的に調査・研究に努めて来たのか、ご理解いただけたのではないだろうか。

残念ながら最初期の北陸人類学会は線香花火のようにわずかな期間で消えてしまったが、昭和期に誕生した石川考古学研究会と金沢大学の考古学的活動は今後も止まることなく続く。現在、石考研は創立70年を超えており、金大考古学研究室は2024（令和6）年に50周年を迎える。これからも両者の活動の先には、我々の郷土の歴史に関わる、さらなる重要な発見が多数待っていることだろう。

考古学は、物的な証拠に基づいて先人の営みをリアルに知ることができる、人類にとって非常に意義のある学問である。我々現代人が、過去の人々から学ぶことは実に多い。その手がかりである考古資料・埋蔵文化財は、一片たりとも失うわけにはいかない貴重な財産である。石川の考古学研究者たちは、引き続き周囲の皆様にご支援いただきながら、これら地域の遺産を後世まで末永く守り伝えていかねばならない。





## 附録2 関連年表

1895 (明治 28)	第四高等学校の須藤求馬を発起人総代として北陸人類学会発会
1897 (明治 30)	北陸人類学会会員が小松市御幸塚を発掘。石川県初の発掘調査 この頃、大根布・栗崎など内灘砂丘一帯で遺物の発見が相次ぐ。
1921 (大正 10)	上田三平が、史跡調査のために石川県に嘱託として招聘され、3年にわたり 県内各所を調査する。
1927 (昭和 2)	この年から終戦まで、秋田喜一ら民間の研究者が個々に発掘調査などを実施
1948 (昭和 23)	高堀勝喜が中心となって石川考古学研究会発会 (初代会長 鍋木勢岐)
1952 (昭和 27)	九学会連合による能登総合調査 (~ 1953 (昭和 28))
1954 (昭和 29)	石考研をはじめとする五学会連合による旧福野潟周辺総合調査
1957 (昭和 32)	橋本澄夫らが七尾市三室古墳群を発掘
1958 (昭和 33)	橋本澄夫らが七尾市高木森古墳を発掘 日本考古学協会第 22 回総会、七尾で開催
1968 (昭和 43)	井上鋭夫が金沢城跡各所を発掘 (~ 1969 (昭和 44)) 石川県立郷土資料館開館
1969 (昭和 44)	北陸自動車道建設に伴う発掘調査 (~ 1974 (昭和 49)) 金沢大学考古学クラブ発会 県下初の旧石器時代遺跡の調査として、能美市灯台笹遺跡の発掘 この頃、大規模開発による遺跡破壊が問題となる。
1970 (昭和 45)	井上鋭夫が福井市一乗谷朝倉氏遺跡を発掘調査 金沢市高尾城跡破壊問題
1973 (昭和 48)	金沢大学考古学クラブが金沢大学考古学研究会に改称 県・町による初の史跡整備事業として、寺井山 5 号墳の整備が完了 日本考古学協会第 40 回大会、金沢で開催
1974 (昭和 49)	金沢大学考古学研究室設立
1978 (昭和 53)	能登海浜道建設に伴う寺家遺跡の保存活動
1979 (昭和 54)	石川県立埋蔵文化財センター設立
1984 (昭和 59)	金沢大学角間総合移転用地内発掘調査 (~ 1987 (昭和 62)) 金沢大学考古学研究会が能美市秋常山 1 号墳発見
1986 (昭和 61)	石川県立郷土資料館が出羽町に移転し、石川県立歴史博物館となる。
1989 (平成元)	金沢大学資料館設立 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会設立
1997 (平成 9)	金沢大学埋蔵文化財調査センター設立
1998 (平成 10)	石川県立埋蔵文化財センターと社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が統合し て財団法人化し、中戸町に石川県埋蔵文化財センターとして発足
2001 (平成 13)	石川県教育委員会事務局文化財課内に金沢城研究調査室設置 (平成 19 (2007), 石川県金沢城調査研究所に改組)
2013 (平成 25)	北陸新幹線 (敦賀延伸) 建設に伴う発掘調査 (~ 2020 (令和 2))
2016 (平成 28)	金沢大学が御所八ッ塚山古墳群現地説明会開催
2021 (令和 3)	日本考古学協会 2021 年度金沢大会、金沢大学角間キャンパスで開催

### 附録3 考古学用語集 ※本書に登場する主な考古学用語を、概ね時代順に記した。

- ・縄文時代（じょうもんじだい） 旧石器時代に次ぐ時代で、今から約16000年前～約2500年前にあたる。当時の人々は、主に狩猟・採集・漁撈を中心に暮らしていたと考えられている。
- ・縄文土器（じょうもんどき） 縄文時代に作り使われていた素焼きの土器。概して装飾性が高いが、バケツ形の深鉢が多く、主に煮炊き用に使われていたと考えられている。
- ・磨製石斧（ませいせきふ） 石を磨いて作った縄文時代の斧
- ・打製石斧（だせいせきふ） 石を打ち欠いて作った縄文時代の土掘り具。外観が斧状を呈する。
- ・石錘（せきすい） 石の両端に紐掛けを作出した錘。漁網錘と編物錘の二説がある。
- ・弥生時代（やよいじだい） 大陸からの影響を受けて稲作が本格化した時代。東西で開始時期に差があるが、紀元前10世紀～紀元前5世紀頃にかけて始まり、3世紀半ばまで続いた。
- ・弥生土器（やよいどき） 弥生時代に作られた素焼きの土器で、概して縄文土器より装飾が少ない。甕・壺・高杯などを中心とし、縄文土器よりも機能分化が進んでいる。
- ・古墳時代（こふんじだい） 有力者の墳丘墓である古墳を作った時代。3世紀半ば～7世紀頃
- ・土師器（はじき） 古墳時代以降に作られた素焼きの土器。橙色・赤褐色などを呈する。
- ・須恵器（すえき） 古墳時代～平安時代に大陸系の製陶技術を用いて作られた素焼きの陶質土器。青灰色を呈して硬い。
- ・高杯（たかつき） 椀・皿状の器に脚部が付いたもの。弥生時代以降の食物盛り付け容器
- ・蓋杯（ふたつき） 古墳時代～平安時代に作られた、蓋と身のセットからなる須恵器の食器
- ・臚（はそう） 古墳時代の須恵器の一種。球形の体部にラップ形の口が付くもので、体部の穴に管を取り付けて液体を注ぐために使ったと考えられている。
- ・埴輪（はにわ） 古墳の墳丘や周囲に並べられた土製品。円筒形や人形、動物形などがある。
- ・古代（こだい） 概ね飛鳥・奈良・平安時代を指す。7世紀～12世紀頃で、一部、古墳時代と重複がある。
- ・墨書土器（ぼくしょどき） 古代などの土器に墨で文字や記号などが書かれたもの
- ・石帯（せきたい） 古代の役人の石製帯飾り。カマボコ形の丸鞆と方形の巡方がある。
- ・青磁（せいじ） 中国で誕生した磁器の一種。器面に青緑色の釉が施される。
- ・中世（ちゅうせい） 概ね鎌倉時代～戦国時代を指す。12世紀末～16世紀頃にあたる。
- ・珠洲焼（すずやき） 平安時代末～室町時代に珠洲市域で作られた須恵器系の焼き物
- ・石塔（せきとう） 石製の仏塔。供養塔や墓として作られた。宝篋印塔や五輪塔などがある。
- ・近世（きんせい） 概ね江戸時代を指す。17世紀～19世紀頃にあたる。
- ・土師器皿（はじきさら） 素焼きの皿。かわらけとも言う。食器や灯明皿などに使用された。
- ・春日山窯（かすがやまよう） 1807（文化4）年に金沢卯辰山で創業した再興九谷最初期の窯
- ・暦手茶碗（こよみでちゃわん） 器面に暦が巡る茶碗。石川では、小松市域の再興九谷若杉窯・八幡窯で生産されていた。
- ・土人形（つちにんぎょう） 近世の土製人形。子供の玩具とされるが、信仰的な面もある。
- ・近代（きんだい） 概ね明治～戦前を指す。19世紀後葉～20世紀前半頃
- ・病院食器（びょういんしょつき） 近代の病院で使われていた食器。器面に病院銘が入る。
- ・監獄食器（かんとくしょつき） 近代の監獄で使われていた食器。器面に「監」銘が入る。
- ・埋蔵文化財（まいぞうぶんかざい） 文化財保護法上の遺跡・遺構・遺物のこと。土地に埋蔵されている文化財であり、法的保護の対象となっている。

## 参考・引用文献

- ・石川県教育委員会 1970 『金沢城二ノ丸跡発掘調査概報』
- ・石川県立歴史博物館 1992 『みつけた！発掘物語』
- ・石川県立歴史博物館 2018 『いしかわ歴史発掘』
- ・石川考古学研究会 1998 『石川考古学研究会設立 50 周年記念誌 石川考古学の 50 年』
- ・井上鋭夫 1969 「金沢城址の発掘」『金沢大学法文学部論集』史学編 16 金沢大学法文学部 pp. 1～30
- ・宇ノ気町史編纂委員会 1970 『石川県宇ノ気町史』
- ・金沢大学考古学研究会 1975 『金沢大学考古学研究会活動報告』第 1 号
- ・金沢大学考古学研究会 1976 『金沢大学考古学研究会活動報告』第 2 号
- ・金沢大学考古学研究会 1981 『金沢大学考古学研究会活動報告』第 3 号
- ・金沢大学考古学研究会 1986 『金沢大学考古学研究会活動報告』第 4 号
- ・金沢大学考古学研究会 1990 「御所八ッ塚山古墳群の調査」『北陸史学』第 39 号 北陸史学会 pp. 72～87
- ・金沢大学考古学研究室 2013 「末古窯跡群分布調査報告（「金大考古」第 12 号から転載）」『金沢大学考古学紀要』第 34 号 金沢大学文学部考古学講座 pp. 53～74
- ・金沢大学資料館 2015 『資料館 × 埋蔵文化財調査センター 平成 27 年度特別展 加賀藩与力 武士のほまれ』
- ・河村好光 1993 「時国古屋敷遺跡の発掘調査（二）発掘調査と遺構の検討」『歴史と民俗』平凡社 pp. 239～290
- ・佐々木達夫 1981 「金沢城跡の発掘：1977 年」『日本海域研究所報告』第 13 号 金沢大学日本海域研究所 pp. 89～108
- ・佐々木達夫・在田則子・中村慎一・波頭桂・橋爪直子 1998 「資料館での開催の展覧会から 再興九谷・松山窯展」『資料館だより』11 金沢大学資料館 p. 2
- ・佐々木達夫・高濱秀・藤井純夫・中村慎一 2004 「金沢大学文学部考古学講座・30 周年」『金沢大学考古学紀要』第 27 号 金沢大学文学部考古学講座 pp. 1～3
- ・佐々木花江・妹尾裕介・横山方子 2017 『金沢大学構内遺跡 一角間遺跡、宝町遺跡・鶴間遺跡—』金沢大学埋蔵文化財調査センター
- ・貞末堯司・石崎俊哉・前田清彦 1986 「金沢城の発掘 1981：藤右衛門丸北側法面裾部発掘報告」『日本海域研究所報告』第 18 号 金沢大学日本海域研究所 pp. 237～326
- ・貞末堯司・藤則雄・佐々木達夫・倉林眞砂斗・中村哲也 1989 『角間 一金沢大学総合移転用地内埋蔵文化財調査報告—』金沢大学遺跡調査委員会
- ・貞末堯司・金沢大学文学部考古学研究室 1991 「阿弥陀藪遺跡の発掘—1990 年—」『日本海域研究所報告』第 23 号 金沢大学日本海域研究所 pp. 137～260
- ・橋本澄夫 1970 『石川県考古学便覧 I』北国出版社
- ・橋本澄夫 1990 『日本の古代遺跡 43 石川』保育社
- ・北陸人類学会 1896 『北陸人類学会志』第 1 編
- ・北陸人類学会 1898a 『北陸人類学会志』第 2 編
- ・北陸人類学会 1898b 『北陸人類学会志』第 3 編
- ・北陸人類学会 1901 『北陸人類学会志』第 4 編
- ・松永篤知 2018 「金沢大学資料館所蔵考古資料の再整理」『金沢大学資料館紀要』第 13 号 金沢大学資料館 pp. 17～25
- ・松永篤知 2019a 「金沢大学資料館所蔵考古資料に関する調査研究 2018」『金沢大学資料館紀要』第 14 号 金沢大学資料館 pp. 39～50
- ・松永篤知 2019b 「金沢大学埋蔵文化財調査センター」『大学と埋蔵文化財』広島大学総合博物館 p. 5
- ・松永篤知・小林克也・黒沼保子・森将志・野口真利江・竹原弘展 2021 『金沢大学構内遺跡 宝町遺跡 一宝町遺跡第 19 次発掘調査報告書—』金沢大学埋蔵文化財調査センター
- ・三浦純夫・在田則子 1994 「金沢城本丸跡の石造遺物」『資料館だより』5 金沢大学資料館 pp. 5～7
- ・三浦純夫 1997 「金沢城御宮跡出土の石造遺物」『資料館だより』9 金沢大学資料館 p. 5
- ・美馬市教育委員会 2012 「北陸人類学会の創始者 須藤求馬」『郷土の先賢たちの学びと業績』pp. 98～116



**令和3年度金沢大学資料館特別展  
金沢大学と石川県の考古学  
—北陸人類学会から現在までの歩み—**

開催期間：令和3年9月10日（金）～10月25日（月）

編集・発行：金沢大学資料館  
金沢大学埋蔵文化財調査センター  
石川考古学研究会

発行日：令和3年9月10日

印刷：能登印刷株式会社